

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
										■	

単元名 大地の変化（地層の重なりと過去の様子）

1 学年

小	中
1	①
2	2
3	3
4	
5	
6	

2 教科・領域

国語	生活
社会	家庭
算数	図工
数学	道徳
理科	総合

3 見方や考え方

多様性
関連性
空間的広がり
時間的変化

4 資質・能力

知識・技能
思考力
判断力
表現力
主態度

背景

本単元では示相化石の学習から地質時代を考える。本来は、第四紀の詳細までは扱わないが、印旛沼周辺で出土したナウマンゾウの骨格や木下層の貝化石などから更新世の変遷を取り上げ、地層の形成と化石の成因の学習を通して、地層と水の関係に迫りたい。そして、大地の変化という壮大な時間的変化を実感させたい。

印西市双子公園には、ナウマンゾウの石像や発掘当時の様子から推論される当時の様子について記された石碑がある。また、今から約45万～10万年前、下総台地は「古東京湾」に沈んでいた時期が多かった。1966年、旧印旛村（現在の山田橋付近）でナウマンゾウの骨格化石が発掘された。発見されたのは約20万年前の清川層中からで、氷期の到来によって古東京湾が一時的な海退により沼沢地化したときに下総台地を訪れたものと考えられる。この時代が氷期であったことは佐倉市・酒々井町付近の上岩橋貝層から寒流系の貝化石が出てきたことからもわかる。さらに、その後、間氷期に入り、海進が起こる。その際に出てきた貝化石の層が木下貝層で、暖流系の貝化石から、その時代が温暖であったことがわかる。この木下層は、印西市にある木下万葉公園や印旛歴史民俗資料館で見ることができる。

約10万年前頃から気候の寒冷化に伴い海退し、約7万年前頃には最終氷期が訪れる。約2万年前の最寒冷期には古東京湾も完全に陸地化した。海退の間、富士山や箱根などの火山活動により関東ローム層が形成された。

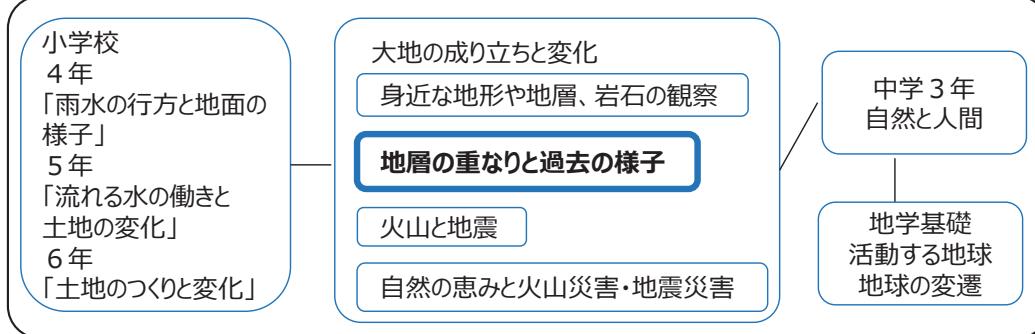
その後、7000～6000年前頃までの海進、その後の海退により、現在の地形になった。

第1時では、印旛沼の地下地質断面図などを利用して水環境の変化によってさまざまな変遷を経て地層ができてきたことを想像させ、第3時では、化石をもとに古生物が過ごしていた過去を想像させるような授業を行っていきたい。

ねらい

- 地層の形成の規則性、地層とその中の化石を手掛かりとして過去の生活環境と年代を推定することについて、知識を身につけている。
- 地層の形成と過去の様子に関する事物・現象の中に問題を見いだし、目的意識をもって観察、実験などを行い、地層の形成についての規則性、地層とその中の化石を手掛かりとした過去の環境と地層の年代の推定などについて自らの考えをまとめ、表現している。
- 地層の重なりと過去の様子に関する事物・現象に進んで関わり、それらを科学的に探求しようとする。

系統



資料・準備・関連機関等

資料

- 『印西市歴史読本 原始・古代編』印西市教育委員会、2011
- 『千葉県の自然誌 本編2 千葉県の自然 県史シリーズ41』千葉県史料研究財団、千葉県 1997
- 『本塙の歴史—印旛沼に育まれたある農村の物語—』本塙村教育委員会、2008
- 『大いなる印旛沼—過去・現在・未来—』印旛沼環境基金、2002

関連機関

- 千葉県立中央博物館、千葉県立房総のむら風土記の丘資料館
- 印旛歴史民俗資料館、木下交流の杜歴史資料センター、木下万葉公園、双子公園

指導計画

時配	学習内容
1 (本時)	地層のでき方（地層の重なり方と広がり方、かぎ層、柱状図）
2	地層をつくる岩石（堆積岩）
3 (本時)	堆積岩と化石からわかる（示準化石、示相化石、地質年代）

5 指導時間

- ・準備 2時間
- ・授業時間 2時間

単元を通してねらう見方や考え方

私たちが住んでいる土地の下にも空間的な広がりがあることを実感するとともに、各地層が、様々な自然現象と関連して積み重なり、変化が起こっていることを推定する。また、地層の特徴や出土した化石から長い時間をかけて、環境が変化してきていることを見いだす。

本時の指導 1／3

(1) 目標 ○地層のつくりや重なり方について理解している。

○地層の形成と過去の環境の変遷を関連させて、地層のでき方を推定できる。

○身近な地域の地層のつくりや重なりに关心をもち、 資料から地層のでき方を考えようとする。

(2) 展開

学習過程	時配	学習活動と主な発問(○)	指導や支援(・)評価(☆)	資料
見出す	10	○地面の下はどうなっているのだろう。 •本時の学習課題を確認する。	•小学校6年生で学習した「土地のつくりと変化」の内容を思い出させる。	校舎やグラウンドの写真
調べる	35	○印旛沼では、昔何が起こっていたのだろう。 ○地層に何が起ったのだろうか。	•予想する。 •地層のでき方についてまとめる。 •小学校5年生で学習した「流れる水の働きと土地の変化」と関連付けながら地層のでき方を整理させる。 •マトリックスを用いて、各班で資料を読み取らせた後、発表させる。利根川の氾濫による逆三角州、火山灰の降灰によってできた関東ローム層、沖積層から海の中で土砂が積もったことなどを推定させる。 ☆資料をもとに、印旛沼の環境の移り変わりについて推定することができる。【思考・判断・表現】 •褶曲、断層写真から地層に力が加わることを見いだせる。力の詳しい原因については、単元の後半に学習することを伝える。	印旛沼の地質断面図 褶曲・断層写真
まとめあげる	5	•本時の学習をまとめる。	地層は、流れる水のはたらきや火山の噴火によって堆積された土砂によってできる。	

(3) 板書計画

<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">地層は、どのようにできたのだろうか？</div>	☆昔、印旛沼で起こっていたこと									
☆予想	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="width: 50%;">資料からわかる特徴</th><th style="width: 50%;">推定される現象</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>三角州</td><td>利根川から水が流れ込んだ。</td></tr> <tr> <td>沖積層</td><td>昔、ここは海だった。</td></tr> <tr> <td>...</td><td>...</td></tr> </tbody> </table>		資料からわかる特徴	推定される現象	三角州	利根川から水が流れ込んだ。	沖積層	昔、ここは海だった。
資料からわかる特徴	推定される現象									
三角州	利根川から水が流れ込んだ。									
沖積層	昔、ここは海だった。									
...	...									
☆地層のでき方	☆地層に加わる力									
	☆まとめ <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">地層は、流れる水のはたらきや火山の噴火によって堆積された土砂によってできる。</div>									

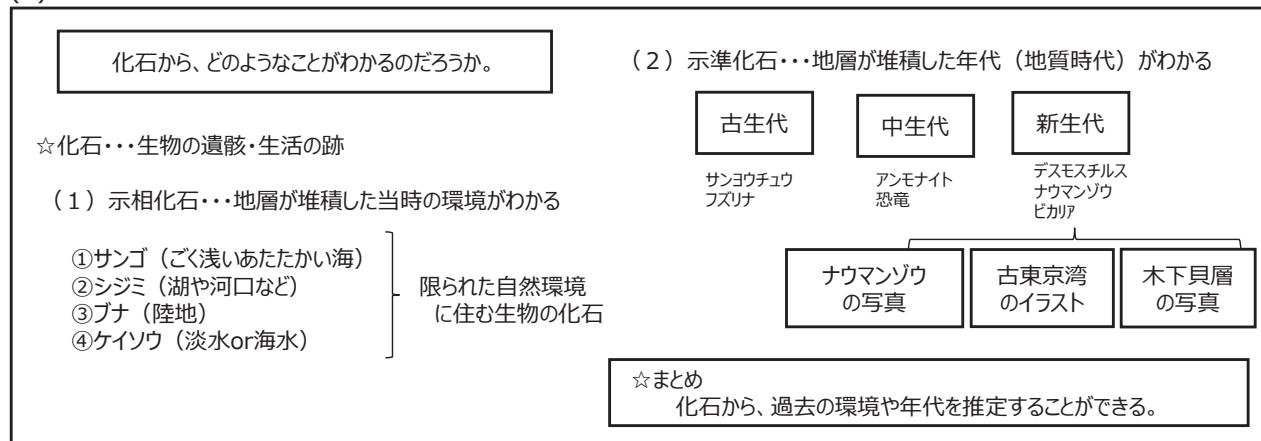
本時の指導 3 / 3

- (1) 目標 ○化石は堆積した当時の状況を知る手がかりになることや、示相化石や示準化石について理解している。
 ○化石の特徴をもとに、地層のできた時代や当時の自然環境について多面的に考えながら推定できる。
 ○化石に興味をもち、堆積した当時の自然環境や年代を進んで調べようとする。

(2) 展開

学習過程	時配	学習活動と主な発問(○)	指導や支援(・)評価(☆)	資料
見出す	10	○化石はどうやって出てきたの? ○化石から考えると、印旛沼は昔、どのようなところだったのだろうか? ○化石とは何だろうか?	・アンモナイトや葉など、典型的な化石を見せ、堆積岩との関連性を想起させる。 ☆写真から当時の環境を進んで推定しようとする。【主体的に学習に取り組む態度】 ・化石の定義を確認する。生痕化石についても理解させる。	アンモナイトなど ナウマンゾウの復元骨格、木下貝層の写真
調べる	20	・化石を観察する。 ・「崖の上のポニヨ」の一部を視聴する。	・示相化石を中心に観察。化石の特徴を見出し、生息環境を想起させる。 ・観察結果を出させ、示相化石を説明させる。 ・デボン紀と現代の生活圏の融合映像から、私たちが生活している場所が海であった時代があったことを想起させる。	示相化石標本 映像
深める	15	○地球にはどんな歴史があったのだろうか? ○印旛沼周辺の環境の移り変わりをもう一度考えよう。	・化石を一つ一つ確認しながら、地質時代の変遷の概略と、示準化石について説明する。 ・導入で見せた写真の順番だけを示し、印旛沼周辺の環境の移り変わりを推定させる。 ☆化石の写真などをもとに、印旛沼周辺の環境の移り変わりを推定できる。【思考・判断・表現】	示準化石標本 下総台地の移り変わり
まとめあげる	5	化石から過去の環境や年代を推定することができる。 ・化石から、わかることをまとめる。		

(3) 板書計画



資料等

(1) 資料及び使い方

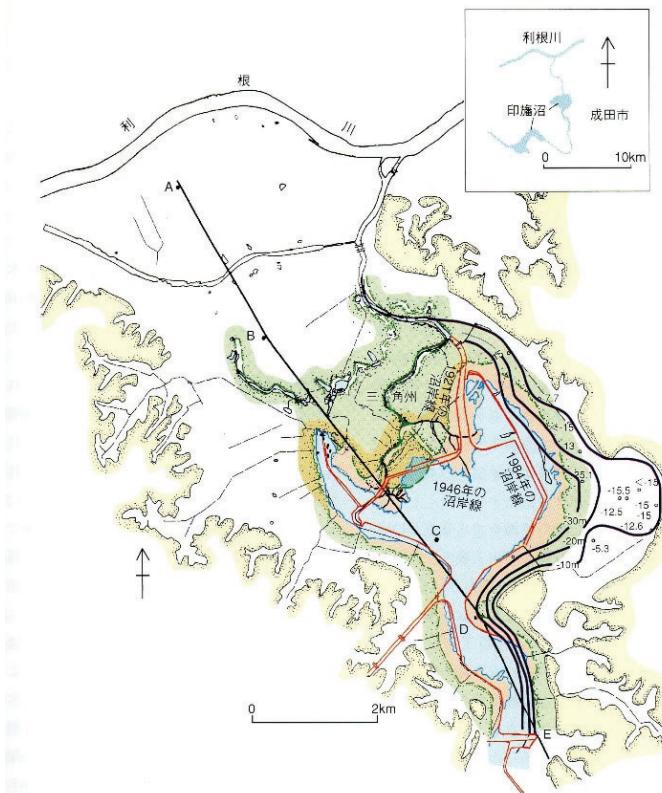


図4-39 印旛沼の三角州の発達と完新統基底深度 (榎井・楠田 1993)
A-E図は、図4-39の地下地質断面を示す。

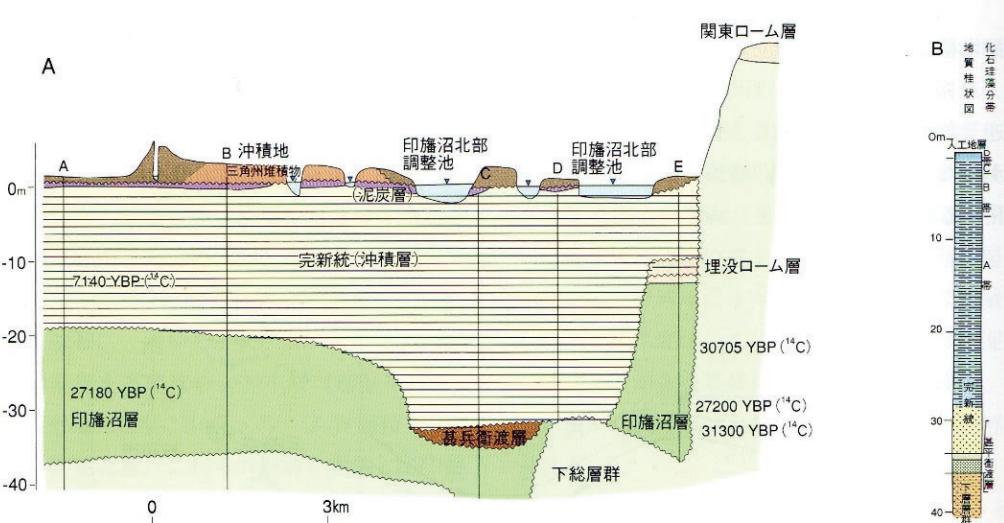


図4-40A 印旛沼調整池（第2印旛沼）（北部）の地下地質断面図 (榎井・楠田 1993)
図4-40B 地質ボーリングC地点の柱状図と化石珪藻分帶 (榎井・楠田 1993)

(千葉県史料研究財団「千葉県の自然誌 本編2 千葉県の自然 県史シリーズ41」千葉県 1997 p.496-497)

【出典】

- 図4-39
 - ・榎井 久、楠田 隆、1993、都市域における海跡湖汚染とその浄化-印旛沼を例として-、地質学論集39号、p130、第1図、◎日本地質学会
- 図4-40A
 - ・榎井 久、楠田 隆、1993、都市域における海跡湖汚染とその浄化-印旛沼を例として-、地質学論集39号、p131、第2図、◎日本地質学会
- 図4-40B
 - ・榎井 久、楠田 隆、1993、都市域における海跡湖汚染とその浄化-印旛沼を例として-、地質学論集39号、p132、第3図、◎日本地質学会



ナウマンゾウの骨格化石が発掘された場所
(印旛捷水路から市井橋、山田橋を見上げる)



ナウマンゾウ復元骨格
(房総風土記の丘資料館)
この復元骨格は、上記の資料館で見ることができる。
1966年、印旛沼捷水路建設するため、基盤の清川層を開削する工事で発見された。
実物標本は国立科学博物館に収蔵されている。

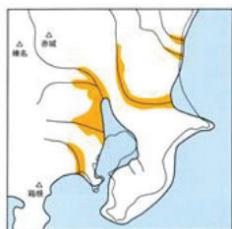


木下層
(木下万葉公園)

①約 50 万～13 万年前

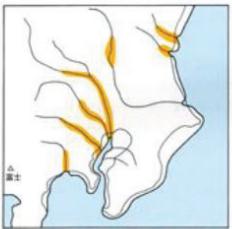


②約 13 万～5 万年前



木下層の貝化石 (印西市立印旛歴史民俗資料館所蔵)

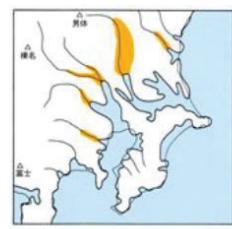
③約 5 万～3 万年前



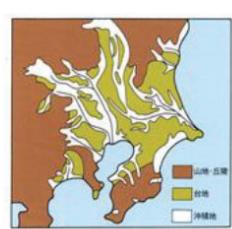
④約 3 万～1 万 2 千年前



⑤約 1 万 2 千年前



⑥現在



下総台地の移り変わり (「本塙の歴史-印旛沼に育まれたある農村の物語」P7より転載)

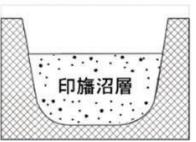
ア



イ



ウ

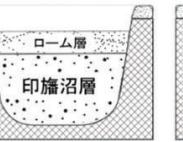


湖沼の時代

印旛沼の生成過程 (「大いなる印旛沼—過去・現在・未来—」P12) より作図

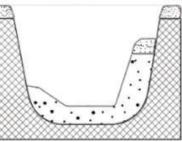
※③とア・イ・ウ、④とエ・オ、⑤とカがそれぞれ対応

工



陸地の時代

オ



海、湖沼の時代

カ



海、湖沼の時代

(2) 発展

- ・関東ローム層は、社会科の「日本の様々な地域」の中で取り扱い、関東地方の自然環境の一つとして、また、畑作との関連性の中で取り扱われる。また、関東ローム層はさらに細分化され、下末吉ロームは主に箱根火山からの火山灰、武蔵野ローム・立川ロームは主に富士山からのものである。約10～1万年前にかけて降り積もった関東ロームが私たちの大地まで、遠くの山々から千葉県にまで火山灰をもたらしていること、また、それが、私たちの住んでいる大地を形成しているところまでつながりを持たせることで、理科の火山や社会科の地理的分野の学習との関連性を図ることができる。
- ・印旛沼でナウマンゾウが発見された約20万年前とアフリカでホモ・サピエンスが出現した時代が重なる。そこから、16～17万年かけて日本列島にまでやってきた。その当時、氷期の真っただ中で、多数出土するナウマンゾウなどの化石や石器などから当時の生活が想像できていることにつながる。社会科の歴史的分野の「身近な地域の歴史」や「古代までの日本」の学習と関連性を図ることができる。
- ・資料（印旛沼の生成過程）をもとに、印旛沼の生成過程を紹介する。下総台地にできた窪地（イ）が古印旛沼になり、そこに堆積したのが印旛沼層（ウ）である。火山灰が堆積し（エ）、川の浸食作用によって谷が形成（オ）されたと考えられる。その後の海進で古鬼怒湾という内湾の時代（カ）に沖積層が形成され、河川の洪水による逆三角州の形成によって湾から分離し、現在の印旛沼となる。地層の重なりと過去の様子を学習する最初の段階で、印旛沼の生成過程をすべて理解する必要はないが、生徒の発想をもとに、必要な部分は紹介し、地球の温暖化、寒冷化に伴う海進や海退、流れる水のはたらきによる浸食作用を想起させることで、壮大な時間的変化を実感させたい。

(3) 授業のポイント

- ・新学習指導要領では、「身近な地形や地層、岩石の観察」という小単元を独立させ、最初に設定している。それをもとに、「地層の重なりと過去の様子」という小単元で学習を深めていくようになっている。「身近な地形や地層、岩石の観察」で、学校のボーリング資料や柱状図などをもとに地層の広がりを実感したうえで、地域の土地の成り立ちや広がりに興味を広げていくような展開としたい。
- ・化石から過去の環境や生物の移り変わりが推定できることを実感できる。
- ・地球全体の歴史的な変遷を学習だけなく、身近な印旛沼周辺から出土した化石を扱うことで身近な地域の歴史を想起できる。その中で、今後、地形的変化の激しい印旛沼を理解していくきっかけとしたい。

(4) 留意点

- ・教科書では、新生代に哺乳類が、その中でも第四紀に人類が繁栄した程度しか扱わない部分である。教員としては、地学的、歴史的背景を捉えつつ、授業を行っていきたいが、多数の用語を出しての学習は、生徒たちに混乱を招く可能性がある。生徒の実態をよく把握し、どこまで内容を深めていくか、つなげていくか検討し、授業を行っていきたい。

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月

単元名 化学変化と原子・分子（化学変化・化学変化における酸化と還元）

1 学年

小	中
1	1
2	②
3	3
4	
5	
6	

2 教科・領域

国語	生活
社会	家庭
算数	図工
数学	道徳
理科	総合

3 見方や考え方

多様性
関連性
空間的広がり
時間的変化

4 資質・能力

知識・技能
思考力
判断力
表現力
主態度

背景

還元とは、酸化物が酸素を失う化学変化のことである。教科書では、酸化銅と炭素の混合物を加熱して金属の銅を取り出す実験を行う。生成した銅の金属光沢、二酸化炭素による石灰水の白濁と、現象ははっきり見えてくるのだが、化学反応式として表現するのには苦手に感じる生徒もある部分である。なぜなら、それまでは、1つの物質が2個以上に分かれたり、2つの物質が1つの物質になる反応を扱っているが、今回は、反応物も生成物も複数で、酸化・還元反応によって組み合わせが変わるのである。モデルを用いて、反応の前後で組み合わせが変化する部分についてはしっかりと捉えさせたい。

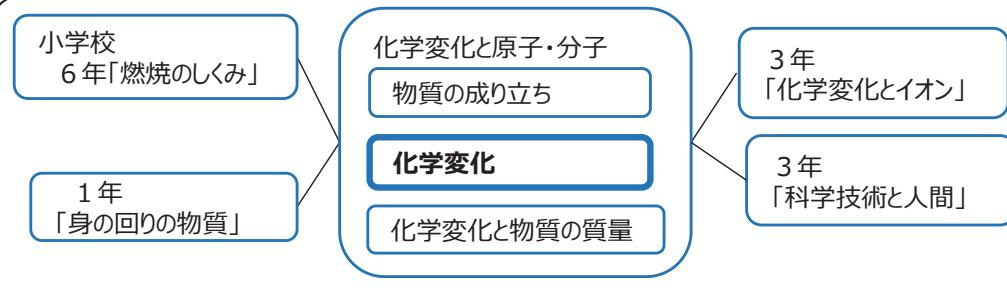
そして、この還元の実験では、酸化銅の還元を扱っているが、製鉄業とつなぎ合わせることで理解を深めていきたい。日本古来の製鉄方法としてはたら法が用いられ、砂鉄と木炭を原料として、還元反応をさせて鉄がつくられていた。一方、現在は、製鉄所において、鉄鉱石に炭素が主成分であるコークスを加え、溶鉱炉の中で加熱しながら還元反応をさせて鉄を取り出している。製鉄所では、高温物を扱う設備の冷却に使用したり、環境対策としての散水を行ったり、たくさんの工業用水が必要になる。千葉市にあるJFEスチールで用いられる工業用水は、印旛沼の水を工業用水として利用している。また、この印旛沼の工業用水は千葉市、市原市、袖ヶ浦市、佐倉市に給水されている。さらに、印旛沼の水は、農業用水、上水道用水としても利用されている。

本単元は、化学変化を学習する単元ではあるが、それをきっかけに地域社会の水資源とのつながりを知る機会にしていきたい。

ねらい

- 化学変化を原子や分子のモデルと関連付けながら、酸化や還元について理解するとともに、それらの観察、実験などに関する技能を身につける。
- 酸化や還元の反応について、見通しをもって解決する方法を立案して観察、実験などを行い、その結果を原子や分子のモデルを用いて考察し、反応の前後では原子の組み合わせが変わることを見いだす。
- 酸化と還元に関する事物・事象に進んで関わり、それらを科学的に探求しようとするとともに、事象を日常生活との関わりでみようとする。

系統



資料・準備・関連機関等

資料 『いんば沼のはなし』公益財団法人 印旛沼環境基金、2018
 「JFEスチール東日本製鉄所千葉地区」
<https://www.jfe-steel.co.jp/works/east/chiba/>
 「独立行政法人 水資源機構 千葉用水総合管理所 印旛沼開発事業」
<https://www.water.go.jp/kanto/chiba/inba/inbanumakaihatsumain.html>

関連機関 JFEスチール東日本製鉄所千葉地区、印旛沼浄水場、佐倉浄水場

指導計画

5 指導時間

- ・準備 1 時間
- ・授業時間 1 時間

時配	学習内容
1～4	年間指導計画に準じた「酸化」の展開。
5～6（本時）	年間指導計画に準じた「還元」の展開。
7～9	年間指導計画に準じた「硫黄と結びつく化学変化」の展開。
10～12	年間指導計画に準じた「化学変化と熱の出入り」の展開。

本時でねらう見方や考え方

化学変化の理解を深めていくために、還元の考え方が鉄鋼業に応用されていることを扱いたい。その中で、千葉市の製鉄所では、印旛沼の水が工業用水として活用され、設備の冷却に加え、製鉄所内における環境対策（散水）でも利用されていることから、印旛沼との関連性を見たい。

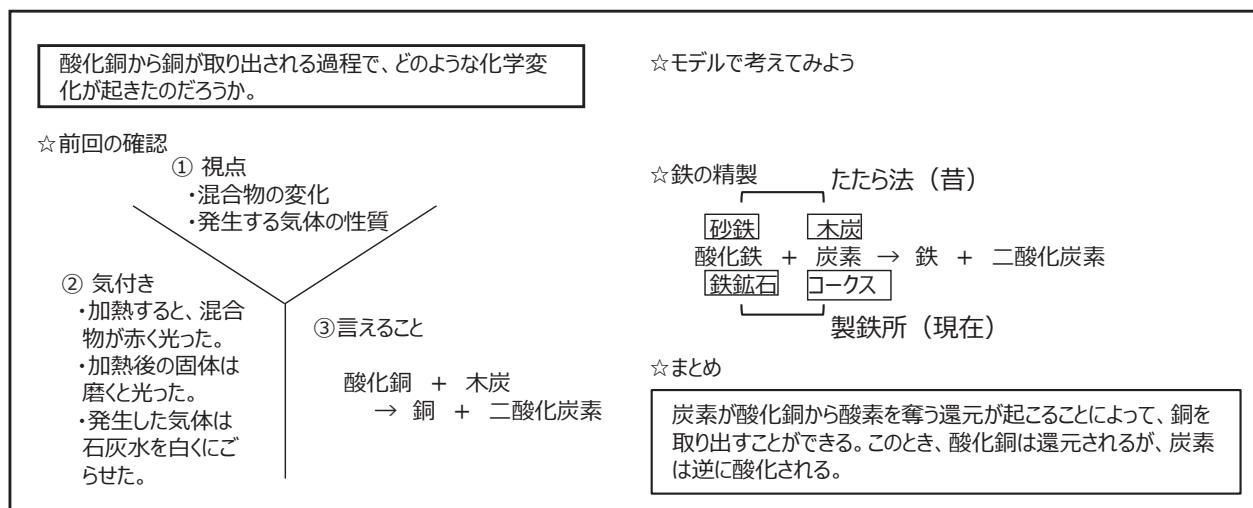
本時の指導 6/12

- (1) 目標 ○モデルを用いて、炭素が酸化銅から酸素を引き離すことで、酸化銅が銅に還元されることを説明できる。
○酸化・還元反応のモデル理解に進んで関わり、反応を実生活との関わりでみようとする。

(2) 展開

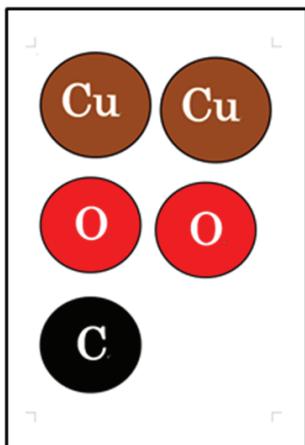
学習過程	時配	学習活動と主な発問(○)	指導や支援(・)評価(☆)	資料
見出す	5	・前回の学習内容について振り返る。	・Yチャートを用いて、前回の実験の視点、気付き、言えることを復習する。	
調べる	12	○どんな化学変化が起きたのだろうか。	・各班に原子モデルを渡し、反応物と生成物の間でどのような変化が起こったのかを推測させる。 ☆モデルを用いて化学変化を推測し、化学反応式として表現することができた。 【思考・表現・判断】	モデル
深める	20	・還元についての説明を聞く。 ○還元は、どのようなところで用いられているのだろうか。	・酸化物から酸素を奪う化学変化を還元ということ、還元と酸化は同時に起こることを確認する。 ・たたら法や製鉄所による鉄の製法を紹介する。千葉にあるJFEスチールでは、印旛沼の水が工業用水として利用されていることを紹介する。	
まとめあげる	8	・本時のまとめをする。	炭素が酸化銅から酸素を奪う還元が起こることによって、銅を取り出すことができる。このとき、酸化銅は還元されるが、炭素は逆に酸化される。	

(3) 板書計画



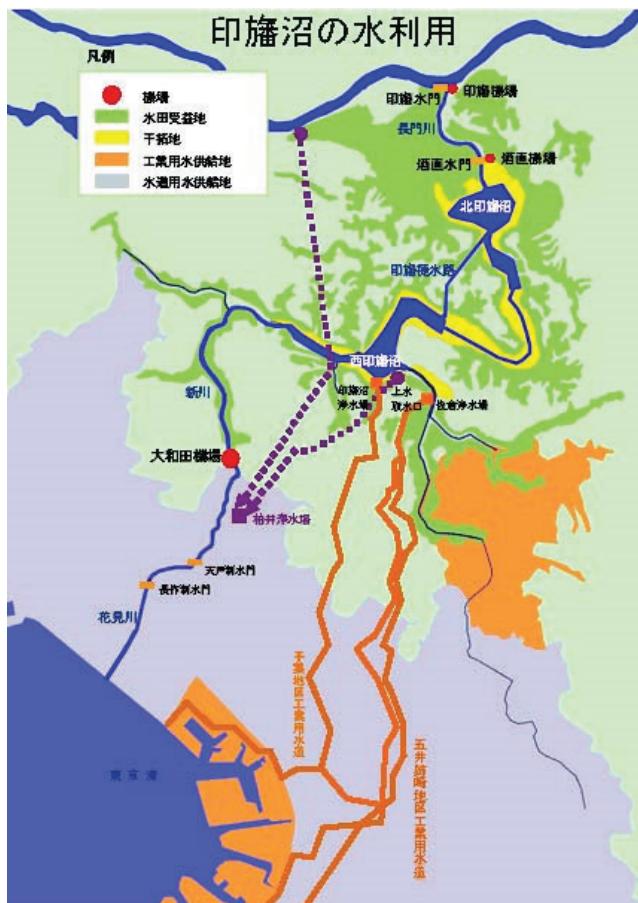
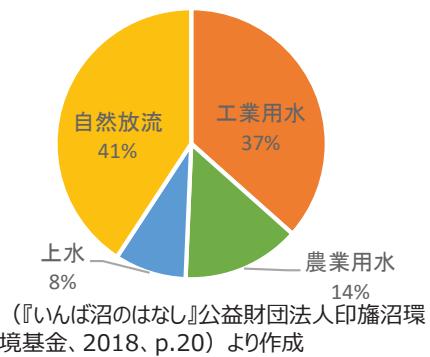
資料等

(1) 資料及び使い方



モデルはこの
ようなものを
つくり、ケント
紙等に各班
分印刷し、
切り離して使
用する。

H24～28年の年平均利用水量



(独立行政法人 水資源機構 千葉用水総合管理所 ホームページ)

印旛沼浄水場の正門のプレートである。左側には、「千葉県工業用水道」、「JFEスチール株式会社」とある。



ポートタワー展望台から見たJFEスチールの敷地である。
環境対策として実施している散水においても一部工業用水
が使用されている。



第3熱間圧延工場の様子である。多量の工業用水を用いて、鉄を引き延ばしている。使用した水の約90%は回収し、再利用している。

(JFEスチールホームページ)

(2) 発展

- ・酸化還元反応の一つとしてテルミット反応の演示も考えられる。アルミニウム粉末と酸化鉄(Ⅲ)をマグネシウムリボンで着火させ、反応させる。酸化鉄(Ⅲ)は陶芸の釉薬の「ベンガラ」として、大型ホームセンター等で入手できる。
- ・たら製鉄に関しては、教科書にものっているが、ジブリ映画「もののけ姫」の中にも製鉄所のシーンが出てくる。たら法への関心をもつきっかけとなる。
- ・君津市などにある日本製鉄では、容器包装プラスチックの約3割を回収し、石炭と合わせてコークスを作っている。他にも様々にリサイクルをしており、物質循環を学ぶきっかけとなる。

(3) 授業のポイント

- ・鉄は表面の酸化被膜によって、錆を防いでいるが、食塩水の成分である塩化物イオンは、その酸化被膜を破壊する作用がある。破壊されたところに水と酸素が結合し、錆が広がっていく。よって、製鉄業では、海水ではなく、淡水が必要となる。還元の前に学習している穏やかな酸化とも関連させて考察していくのも一つである。
- ・材料の調達、製品の運搬を考え、臨海部に製鉄所がある。海水を淡水化することも考えられるが、かなりコストがかかるので、工業用水として、印旛沼の水が送水され、利用されている。
- ・金属は、酸素と結びついた酸化物として自然界に存在していることが多いが、単体として存在する金属には、金属光沢、電気・熱伝導性、延性・展性があり、たくさんの製品に利用されている。その金属が還元によって精製され、熱延過程によって製品化される様子を想起することによって、さらに理解を深めていきたい。

(4) 留意点

- ・酸化銅の還元では、加熱によって混合物が赤く光る場面が見られる。これまでの学習で、生徒はこれまでの学習の中で、「燃える」という現象は、物質が酸素原子と結びつくことで起こると考えており、この酸化・還元反応は理解に困難を伴う。実験事実をしっかりと確認し、モデルを用いて、化学変化の仕組みを理解させるようにしたい。
- ・本授業は、酸化・還元反応の仕組みの理解がメインとなるが、モデル・化学反応式の検討、酸化・還元の仕組みの理解を20分程度で行い、残りの時間で鉄の精製や工業用水の活用を扱いたい。昔と現在の製鉄法を扱うことで、第6時、酸化・還元の導入で活用される製鉄所の仕組みに戻り、理解を深めたい。また、製鉄所の製造工程を扱うことで大量の淡水が必要であることから、印旛沼の水が工業用水として利用されていることを知り、印旛沼の利水に関心を広げていきたい。ただし、十分に酸化・還元反応の仕組みを理解させたい場合は、本展開を「酸化銅の還元」と「鉄の精製」に分けることも考えられる。2時間分に分けるのであれば、教科書の溶鉱炉の図などを利用して、以下の鉄の製錬の仕組みを説明することも可能である。
- ・鉄の精錬では、原料の鉄鉱石(主成分 Fe_2O_3)とコークス(C)と石灰石($CaCO_3$)を溶鉱炉に層状に積み重ねる。炉の下部にある羽口から約1200℃の熱風を高圧で吹き込むと、コークスの燃焼で生じた CO_2 (一部は石灰石の熱分解でも生じる)が、高温のCに触れ、COに変化する($CO_2 + C \rightarrow 2CO$)。こうして生じた高温のCOガスが炉内を上昇していくとき、鉄鉱石を $Fe_2O_3 \rightarrow Fe_3O_4 \rightarrow FeO \rightarrow Fe$ のように段階的に還元していく。このような主に高温のCOにより間接還元される割合が60～70%とされている。残りは、鉄鉱石が高温の炭素に触れて還元される直接還元である($Fe_2O_3 + 3C \rightarrow 2Fe + 3CO$)。

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月

単元名 自然界のつり合い

1 学年

小	中
1	1
2	2
3	③
4	
5	
6	

2 教科・領域

国語	生活
社会	家庭
算数	図工
数学	道徳
理科	総合

3 見方や考え方

多様性
関連性
空間的広がり
時間的変化

4 資質・能力

知識・技能
思考力
判断力
表現力
主態度

背景

本単元までの「生命」を柱とした領域では、植物、動物の生活や種類、そして、それぞれの成長や生殖の仕組みを見てきたが、ここでは、生態系という概念を扱い、生物どうしの関係性を扱う。小学校6年生では、食物連鎖を学習してきたが、さらに複雑である食物網について学習する。また、生態系の中では、生産者と消費者の中でつり合いが保たれていることを見いだしていく。さらに、微生物の働きを調べ、植物、動物及び微生物を栄養の面から相互に関連付けて理解していく。

食物網を学習する際、地上だけでなく、地下、水の中も例としてあげられている。ここでは、印旛沼の自然を理解していくためには欠かせない、水中の生態系の学習を行っていきたい。

生徒に印旛沼やその周辺に生息している動植物を聞くと、圧倒的に多いのが、カミツキガメとブラックバスであった。昨今、外来生物が話題になることが多い関係もあると考えられるが、それ以外の構成要素はほとんどでてこない。成田市や佐倉市では、印旛沼で獲れたモツゴやスジエビなどを佃煮にして売られているが、食べたことがある生徒や、その存在を知っているものは各学級5%程度という状態であった。水の中の生態系へのイメージは非常に乏しい状態である。

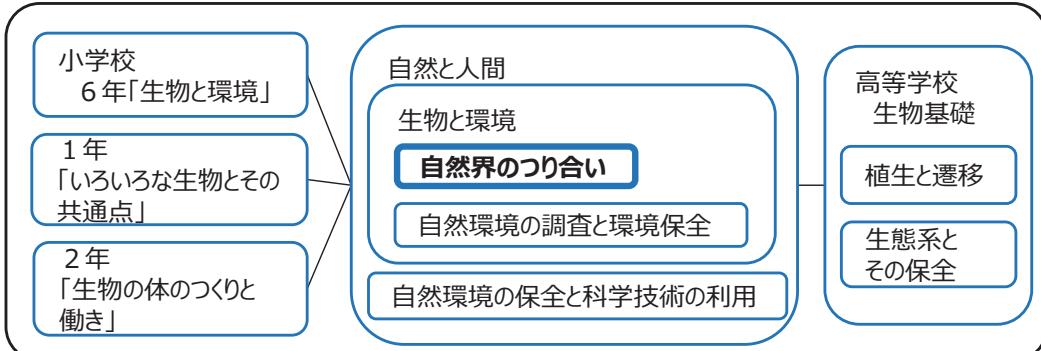
生態系に関する実習に煮干しの解剖がある。煮干しの胃の内容物の観察から、食べているものを推定していくという内容である。印旛沼ということで、モツゴを用いて行おうとしたが、胃液で溶けてしまい、校内に運んだ際には内容物がほとんど見られない状態になってしまった。また、カミツキガメの胃の中を観察ということも考えたが、サンプル入手が難しく、かみちぎった各種生物が生々しく入っており、中学生の時期の解剖には適さない。

そこで、煮干しの解剖から海のプランクトンとの関係を見いだし、印旛沼の生態系へ応用していく形で授業デザインを考えた。

ねらい

- 微生物の働きを調べ、植物、動物及び微生物を栄養の面から相互に関連付けて理解する。
- 自然界では、生物どうしがつり合いを保って生活していることを見いだす。
- 生物どうしのつながりや微生物のはたらき、物質の循環に関心をもち、生活とのつながりなどを進んで調べようとする。

系統



資料・準備・関連機関等

資料

- 『煮干しの解剖教室』小林眞理子、仮説社、2010
 『イワシの自然誌』平本紀久雄、中央公論社、1996
 「印旛沼で見られるプランクトン」千葉県環境研究センター水質環境研究室
<https://www.pref.chiba.lg.jp/wit/suishitsu/plankton/index.html>

関連機関

千葉県水産総合研究センター内水面水産研究所
 印旛沼漁業協同組合、岡野川魚店

5 指導時間

- ・準備 1 時間
- ・授業時間 1 時間

指導計画

時配	学習内容
1	陸の上の食物連鎖
2 (本時)	水の中の食物連鎖
3	土の中の食物連鎖、食物網
4 ~10	生物どうしのつり合い、微生物の働き、物質の循環、自然界のつり合いを考える

本時でねらう見方や考え方

解剖を通して、生物の形態や食性は多様であることを実感するとともに、食物連鎖によって生物同士が関係しあっていることを見いだせたい。

本時の指導 2 / 10

- (1) 目標 ○煮干しの解剖から、小型の魚が何を食べているか見いだすことができる。
 ○食べる生物の方が食べられる生物よりも少ない理由を生物の機能を関連させて考えることができる。
 ○水中の生物同士のつながりがあることに関心をもたせる。

(2) 展開

学習過程	時配	学習活動と主な発問(○)	指導や支援(・)評価(☆)	資料
見出す	5	1 前回の学習内容について振り返る。 水の中では、どのような食物連鎖の関係があるのだろうか。	・生態系における食物連鎖に着目してきたことを復習させる。	
調べる	30	2 実習「煮干しの解剖」を行う。 ①カタクチイワシが食べているものを予想する。 ②煮干しを解剖する。 準備物 湯に浸けた煮干し、ペトリ皿 柄付き針 ③胃の内容物の観察をする。 準備物 顕微鏡、ホールスライドガラス カバーガラス、光源装置 ④カタクチイワシを中心とした食物連鎖の関係性について、まとめる。	・イワシの成長段階や捕食者を伝えたうえで被食者を予想させ、興味を高める。 ・柄付き針の取り扱いに注意し、胃をとり出すところまでは同じ手順で行わせる。 ・内容物の観察から、カタクチイワシは植物プランクトンや動物プランクトンを食べているものを推定させる。 ☆煮干しから胃をとり出し、内容物の観察をすることができる。【知識・技能】（行動観察、ノート）	
深める	10	◎食べる生物と食べられる生物はどちらの方が生物数は少ないのだろうか？ 3 印旛沼におけるモツゴを中心とした食べる、食べられるの関係について考える。	・なぜ、食べる生物はたくさんの生物を食べる必要があるかを手帳を利用して思考し、表現させる。 ☆生物の機能に着目し、理由を説明することができる。【思考・表現・判断】 ・印旛沼周辺で売られているモツゴやスジエビの佃煮を紹介する。 ・モツゴを中心とした食物連鎖を想起させ、被食者である水草やプランクトン、捕食者であるサギやブラックバスなどを取り上げる。	
まとめあげる	5	4 水の中における食物連鎖についてまとめる。 水の中でも、陸上と同じように生物相互の食物連鎖の関係が存在する。	・カタクチイワシ、モツゴを中心とした被食者、捕食者との関係性をまとめさせる。	

(3) 板書計画

水の中では、どのような食物連鎖の関係があるのだろうか。		☆考えてみよう ～食べる生物と食べられる生物はどちらの方が生物数は少ないのか？～
☆実習～煮干し（カタクチイワシ）の解剖～		体が大きいからたくさん食べる必要がある。
(1) 予想～カタクチイワシは何を食べていたのだろう？～		食べる生物 食べられる生物はたくさんないと子孫を残せない。
? → カタクチイワシ → カモメ → 人間 → サメ、イルカ、クジラ		食べられる生物が多くないと、食べる生物は絶滅してしまう。
(2) 実習	柄付き針、メス の取り扱いに注意！！	☆印旛沼のモツゴの食物連鎖の一例 プランクトン → モツゴ → サギ ブラックバス
(3) 結果		☆まとめ
(4) 考察		水の中でも、陸上と同じように生物相互の食物連鎖の関係が存在する。

資料等

(1) 資料及び使い方



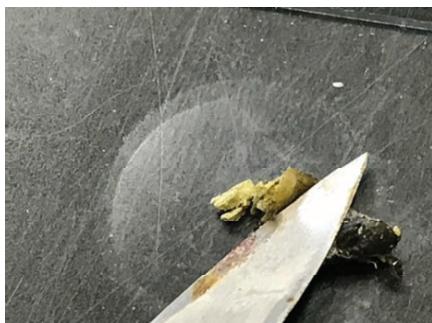
はじめの鰓耙の観察を行うと、歯で噛みちぎるのではなく、浮いているものを水と一緒に取り込み、こしとるイメージを持てる。



周りについている黒い部分は肝臓である。



黄色っぽく見えるものが胃である。
メスなどで押すと弾力性が確認できる。



解剖用メスのミネの部分を使うと内容物をとり出しやすい。
取り出した後、駒込ピペットで水を数滴入れ、柄付き針でよくかき混ぜ、100~400倍の倍率で顕微鏡観察を行う。
上手くいくとプランクトンの単体を観察できることもあるが、多くは消化されかけた体の一部分が多い。単体を観察できた生徒のものを皆に紹介したり、一部分から推定できるプランクトンを推定したりして、観察を行い、カタクチイワシが食べたものを想像させたい。



佐倉市にある岡野川魚店で売られている佃煮である。授業では、実物を見せ、産業との関係も見いだすようにした。



印旛沼のプランクトンは千葉県環境研究センターのホームページに詳しく載っている。これは、フナダカケイソウである。



内水面研究所には、印旛沼に生息している魚の展示スペースがある。特定外来生物の場合は飼育許可書の掲示もある。



「印旛沼ものがたり—あの日あのとき—」
水資源公団
千葉用水総合事業所、2002

これは、印旛沼の漁業の様子である。
モソゴやスジエビから漁業との関連を考えていぐこともできる。

(2) 発展

- 印旛沼周辺で売られているフナ、モツゴ、スジエビなどは、漁師が印旛沼で漁を行って獲ったものである。張網漁や柴漬け漁など、印旛沼で行われている漁業を紹介することで、印旛沼周辺を通ると、沼の中に多数の竹が刺さっているのが分かると思うが、その見方も変わってくる。
- 産卵、生育期には、禁漁期間を設ける。禁漁期間を終える6月下旬、繁茂しているオニビシを日本に二隻しかない大型の菱刈船（もう一隻は諏訪湖）で刈り取り、漁業をスタートさせる。内水面水産研究所は漁師の協力の中、年2回の張網採捕調査による魚介類相調査を行い、環境変化を記録し、漁業環境保全のため、漁業者への指導を行っている。
- モツゴから捕食者を見ていくと、カミツキガメやブラックバス、チャネルキャットフィッシュやアメリカザリガニなど、外来生物の存在も見えてくる。水路をふさいでしまうくらい繁茂してしまうナガエツルノゲイトウの存在も見逃せない。
- プランクトンの存在が明確になっていきることで、次時以降、アオコ（淡水域）、赤潮（海水域）との関連を提示することも可能である。植物プランクトンは有機物製造（光合成）という重要な役割をしているが、上位生物とのバランスが悪く、大量に発生してしまっている状態であることを理解させることで、生態ピラミッドを意識して環境を認知させることができる。

(3) 授業のポイント

- カタクチイワシは、シラス、煮干し、成魚と様々な成長段階で人に食べられていることを説明することで、生活との関連性を見いだし、カタクチイワシへの関心を高めた上で予想させることができる。
- 匝瑳市や九十九里町での煮干しの迅速な製法を紹介することで、食べたものが胃に残っている可能性が高いことが想像でき、より実習の意義についての理解を深めたうえで解剖に取り組むようになる。
- 胃の内容物の観察から、多数のプランクトンを食べていることが想像できる。食べられる生物よりも食べる生物の方が少ない理由を考えさせることで、次時の生態系をピラミッドで表現し、そのつり合いを考える活動へつなげたい。
- 食べられる生物よりも食べる生物の方が少ない理由を考えさせる際、思考ツールの一つ、くま手チャートを活用するようにした。くま手チャートは、ある一つの対象を多角的に見ていくのに有効なツールである。まず、くま手の柄の部分に考える対象を記入する。今回であれば、少ないほうの「食べる生物」である。次に、手の部分に考えを書きだしていく。様々な要因を想起することで、食べる生物と食べられる生物の関係性を多角的に捉えていきたい。

(4) 留意点

- カタクチイワシが食べているものの推測や授業を振り返っての感想を見ると、プランクトンと微生物の概念が混雑している生徒が多かった（中学校過程では菌類と細菌類が微生物の枠組みの中に入る。指導の流れとしては微生物については次時で詳しく取り扱う。）。中には、プランクトンが、今まで学習してきた生物とは異なるもので、その発生方法などを知りたいなどと考えた生徒もいた。補足として、水の中の生物は水中を漂うプランクトン、水中を泳ぐネクトン、水の底で生活するベントスに分類でき、プランクトンの中にも動物と植物がいることを整理すると、既習概念と関連付けて考察を深めていくことができる。

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
									■	■	

単元名 地球の未来のために

1 学年

小	中
1	1
2	2
3	③
4	
5	
6	

背景

中学校では、1学年で植物について学び、2学年で動物について学ぶ。そして、3学年では、生物全体についての関わり合いについて学ぶ。この3学年での単元においては、食物連鎖や生態系等の学習によって自然界全体をとらえ、その多様性について知るだけでなく。植物と動物の関わりや、様々な動物どうしの共存・共生について思考を深めていく内容となっている。さらに、自然保護や環境保全のための知識や理解を深められるように工夫した学習の取り組みが望まれる単元である。

2 教科・領域

国語	生活
社会	家庭
算数	図工
数学	道徳
理科	総合

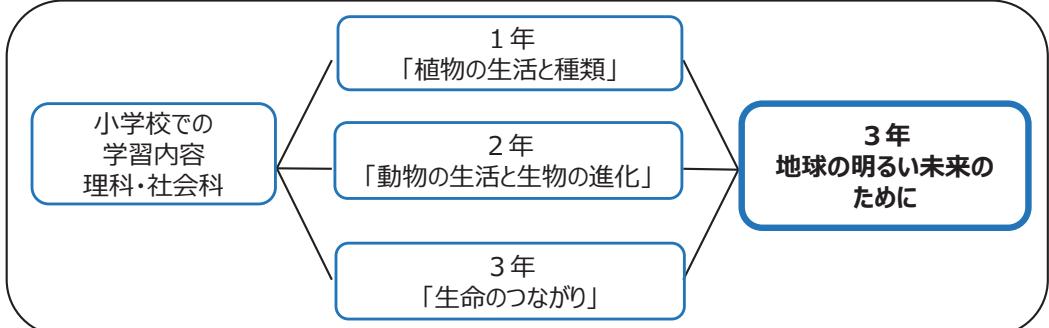
ねらい

- 自然界の生物どうしの関わり合いに対して興味・関心を高める。
- 自然環境や環境保全に向けて、興味・関心を高め、意欲的に学ぼうとする意識を育てる。
- 食物連鎖や生態系等についての知識をもとに、それをもとに、外来生物問題等も含めて、自然界の現状を理解する。
- 自然環境や自然保護について理解し、今後の課題について思考を深める。
- 環境保全に対しての様々な思考を発展させ、実際に行動していこうとする意識を育てる。

3 テーマ

多様性
関連性
空間的広がり
時間的変化

系統



4 資質・能力

知識・技能
思考力
判断力
表現力
主態度

資料・準備・関連機関等

- 水質による指標生物の例（写真） ○ 印旛沼の風景写真 ○ 印旛沼に見られる帰化植物、帰化動物の写真 ○ 印旛沼に昔から生息していた在来生物の写真 ○ 水草を増やす取り組みの写真 ○ 印旛沼で昔生息していたが現在絶滅した生物の写真（ゲンゴロウ等）
- 水質改善に取り組む様子の写真 ○ 水質改善に成功した例（場所等）の写真
- 多様性に優れた場所での生息生物の写真 ○ 水質の良い環境で生息する生物の写真
- 印旛沼の昔と現在の生物生息図
- 他の地域で、生物数が多く多様性に優れた場所での生態系のわかるグラフ等の資料

※写真等の資料は、見やすいように、全てA3サイズ以上の大ささにするか、または、プロジェクターでスクリーンに投影して提示できるようにする。

※○：印旛沼情報広場からダウンロードできるもの ○：それが工夫して入手するもの

5 指導時間

- ・準備 1時間
- ・授業 3時間

指導計画

単元 6 地球の明るい未来のために

	学習内容	時配
A 身近な自然環境の調査	学校周辺の自然環境や生徒の実態を踏まえ、自然環境の変化に関心をもたせ、印旛沼について実際に調査またはインターネットで情報を収集する。	1 本時
	印旛沼の現状について班で話し合い、意見をまとめる。	1 本時
B 自然界のつり合いと人間の活動	印旛沼について、過去と現在を比べ、今後の対策について考え班で話し合いまとめたものを班毎に発表する。	1 本時

本時でねらう見方や考え方

- 印旛沼の現状について知るとともに、生物の多様性について他の地域と比較して考える。
- 将来の印旛沼を想定し、自然保護や環境保全に、興味・関心を高める。

本時の指導 1 / 3

(1) 目標 印旛沼の自然環境を知ることから、身近な場所での自然に対する興味・関心を高める。（主体的に取り組む学習態度）

(2) 展開

学習過程	時配	学習活動と主な発問(○)	指導や支援(・)評価(☆)	資料
見出す	5	印旛沼について、確認を行う。 ・きれい ・以前より環境がよくなつた。 ・整備されている。 ・観光地化されている。	・写真等の資料をもとに視覚から思い浮かべさせる。 ・印旛沼に流れ込む川についても確認しておく。	・印旛沼の美しい風景の写真 ・ワークシート N.O. 1 (ダウンロードできます)
	5	印旛沼の自然環境について調べてみよう。	印旛沼の自然環境はどのような状況なのだろうか。	
調べる	5	○印旛沼に住む動物を想像（予想）する。 ○予想を発表し、板書する。	・最初は、動物全般で考えさせ、その後植物についても考えさせる。 ・個人で考えノートに書く。	※テーマの例 ・水質 ・水生昆虫 ・生息する鳥類 ・昔との比較 ・開拓前との比較 ・微生物 ・生息する動物 ・水源 ・周辺の植物 ・在来生物 ・外来生物 ・生物の多様性 ・プランクトン ・湧き水 ・あおこ 等
	10	調べるテーマについて意見を聞き、いくつかのテーマを決めて調べる。		
深める	20	インターネットで調べる 【予想される反応】 ・予想以上に多くの生物がいた。 ・外来生物が多いことがわかった。 ・在来生物が少ないとびっくりした。 ・昔は、うなぎがいたのか。	・インターネットで調べる。 ・調べた結果をノートに記録する。 ・単に調べるだけでなく、調べたことから何がわかるかを考え、気づくことが大切であることを説明しておく。	☆情報を収集することができたか。 ☆自分の意見をノートに書くことができたか。
	5	○次時、調べた内容をテーマごとの班でまとめ、それを元の班に戻って班内で発表してもらうことを予告する。 【予想されるテーマ】 ・生息する生物について ・外来生物について ・印旛沼の環境改善対策について ・印旛沼での食物連鎖について 他	・生物の多様性を確認しておく。 ・食物連鎖のくずれ（増加した外来生物や、減少した在来生物等）を紹介する。	
まとめ あげる				

(3) 板書計画

印旛沼の自然環境はどのような状況なのだろうか。

【予想】

-
-
-
-
-
-

例 ・きれい ・観光地になっている ・ジョギングコースが整備されている
 ・昔よりも自然が少なくなっている ・野鳥が多い など

押印プリント① 3年組 氏名

学習問題

自分のイメージ
印旛沼は……

印旛沼には、どんな生き物がいるでしょうか？

自分の調べるテーマ

調べたこと

※実際のプリントは、記入欄が大きく、2ページです。

ワークシート（ダウンロードできます）

本時でねらう見方や考え方

- 印旛沼の現状について知るとともに、生物の多様性について他の地域と比較して考える。
- 将来の印旛沼を想定し、自然保護や環境保全に、興味・関心を高める。

本時の指導 2 / 3

- (1) 目標 印旛沼自然環境の現状を知り、他の地域との比較や様々な情報から、環境問題への取り組みに対する興味・関心を高める。(主体的に取り組む学習態度)
- (2) 展開

学習過程	時配	学習活動と主な発問(○)	指導や支援(・)評価(☆)	資料
見出す	2	○前時の学習について、確認を行う。 印旛沼の自然は、どのような状況なのだろうか。		
調べる	10	○調べた結果をテーマごとの班でまとめる。 ○テーマごとの班で調べた結果のポイント(キーワード)をホワイトボードに記入して黒板に掲示する。	・生物の種類だけをまとめるのではなく、気づいたことについて班員の意見をまとめるように指示する。 ☆情報を収集することができたか。 ☆班で意見を集約することができたか。 ・生物の多様性を確認しておく。	・ワークシート N.O. 2 (ダウンロードできます。)
深める	30	○まとめた結果を各班に戻って発表する。 ・外来生物が多いことがわかった。 ・在来生物が少ないとびっくりした。	☆他の地域との違いに気づくことができたか。 ☆過去の印旛沼との違いに気づくことができたか。 ・今後どのような取り組みが必要か、考えていくように課題を提示する。	
まとめあげる	8	○水の汚れと水生生物に関する情報を提供する。(沼における指標生物) ・自然環境のよい地域の生物のようす ・自然環境が壊れた地域のようす ・一例として、外来生物のアメリカザリガニが増えすることで、ボウフラ(蚊の幼虫)を食べるヤゴ(トンボの幼虫)の食性が変化し結果的に蚊が増える等の話題にふれる。 ※ヤゴは、アメリカザリガニがいると、身を隠して、ボウフラ以外の生物を餌として生きていく。そのため、ボウフラの個体数が増加する結果となる。 ※アメリカザリガニによって、ヤゴの個体数が減少することはない。	【提供する情報】 ・様々なNPO法人 ・清掃ボランティア ・外来生物の駆除 ・募金活動 ・その他	・過去と現在の生物生息図

(3) 板書計画

印旛沼の自然は、どのような状況なのだろうか。				理科プリント② 3年 組 氏名 学習問題
<ul style="list-style-type: none"> テーマごとの班で集約した結果のポイント(キーワード)をホワイトボードに書いて貼る。 				自分の調べたテーマ
				同じテーマの人と話し合った内容・情報
				このデータから考えられること
				班のメンバーから得られたこと
				考えられる印旛沼の状況
				※実際のプリントは、記入欄が大きく、2ページです。
				ワークシート(ダウンロードできます)

例

・外来種が増えている	・カミツキガメ	・昔に比べると生物の種類が減っている
・在来種が減っている	・絶滅した種がいる	・水が汚れてきた
・溶存酸素	・野鳥	・ブラックバス
		・ヘドロ
		など

本時でねらう見方や考え方

- 印旛沼の現状について知るとともに、生物の多様性について他の地域と比較して考える。
- 将来の印旛沼を想定し、自然保護や環境保全に、興味・関心を高める。

本時の指導 3 / 3

(1) 目標 印旛沼の自然環境の現状を知るとともに、改善していく必要性に気づき、環境保全に向けた意識を高める。
(知識・理解 および 思考力・判断力・表現力)

(2) 展開

学習過程	時配	学習活動と主な発問(○)	指導や支援(・)評価(☆)	資料
見出す	2	印旛沼の自然環境の実態について確認する。 ○自分たちに、できることはないだろうか。	・他の地域での取り組み等を紹介し、参考にさせる。	・活動状況の写真 ・ワークシート N.O. 3 (ダウンロードできます。)
	5	印旛沼の自然環境を保全するには、どうすればよいだろうか。		
調べる	15	○班で話し合い意見をまとめる。 【予想される意見】 ・外来生物を駆除する。 ・自然保護に訴える看板を立てる。 ・環境問題に関して勉強する。 ・保全のための費用を募金で集める。 ・清掃ボランティア 等	・班で話し合う。 ・班で意見を集約しホワイトボードに記入する。 ☆班で意見を集約することができたか。 ・今後どのような取り組みが必要か、考えていくように課題を提示する。 ・最初は、実現や実行が難しいものも意見として出てくるであろうが、それを否定せずに考えさせ、少しずつ実現可能なものに絞り、最終的には中学生や高校生でも実行できるものが提案できるように支援していく。	・ホワイトボード
深める	25	○班ごとに発表する。	☆印旛沼の将来に向けて、考えることができたか。 ☆印旛沼の未来のために、何が必要かを考えていこうとする意識をもつことができたか。	
まとめあげる	3	○少しずつ改善されている印旛沼の自然環境がまだまだ改善の余地があることに気づかせる。	・実際に印旛沼で活動している人たちの様子を写真で紹介する。 ・参考として、「谷津」や「里山」等を紹介する。	・活動状況の写真

(3) 板書計画

印旛沼の自然環境を保全するには、どうすればよいだろうか。

・班で集約した結果 ※ホワイトボードに書いたものを貼る。

1班

2班

3班

4班

5班

6班

7班

8班

例

・外来種を駆除する
・ゴミを拾う
・雑草を駆除する
・水質を改善する
・環境改善の費用を募金で集める
・どうすれば元の生態系に戻せるか勉強する
など

理科プリント③ 3年 組 氏名

学習問題

印旛沼の環境を守る（戻す）ために…

具体的な方法

もっと具体的に、頑張れば自分たちで実行できること

感想など

※実際のプリントは、記入欄が大きく、2ページです。

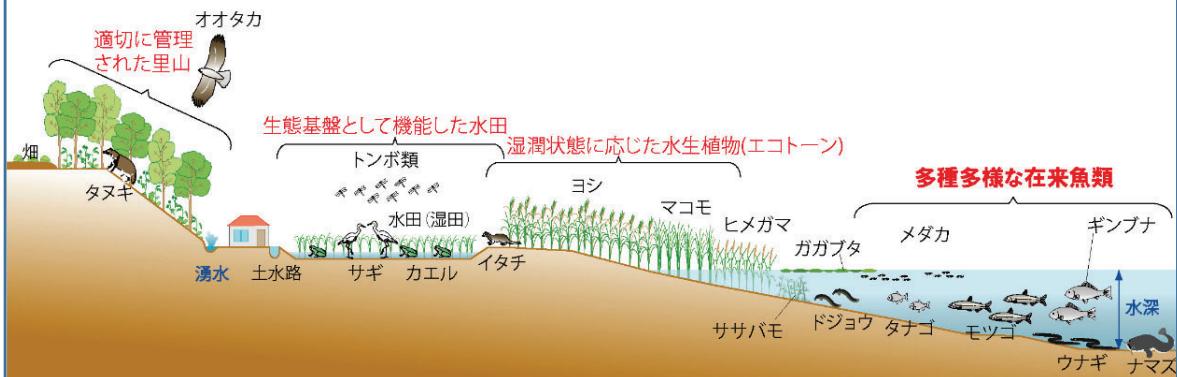
ワークシート（ダウンロードできます）

資料等

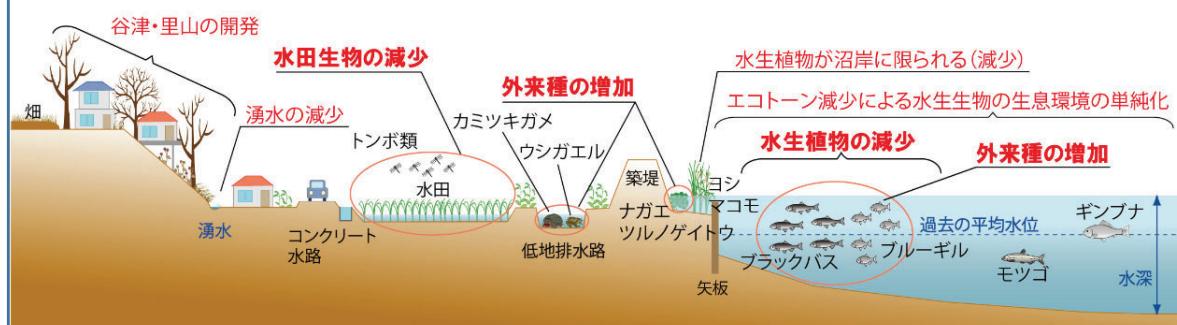
(1) 資料及び使い方

3時間目の授業（本時）で使用する資料 ※カラー印刷したものを生徒全員に配る

1960年以前の印旛沼



現在の印旛沼



参考資料 生物の多様性（個体数が多いと思われる主な種類）

※公益財団法人印旛沼環境基金ホームページ参照

	昔の印旛沼	現在の印旛沼
魚類	ギンブナ、メダカ、モツゴ、タナゴ、ウナギ、ナマズ、ドジョウなど	ギンブナ、モツゴ、ブルーギル、ブラックバスなど
鳥類	カラス、スズメ、ツバメ、キジ、メジロ、ウグイス、ヒバリ、カイツブリ、シジュウカラ、ムクドリ、ヒヨドリ、モズ、フクロウ、ウ、カワセミ、コサギ、チュウサギ、ダイサギ、アオサギ、カモメ、カモ、ハヤブサ、ハト、ホトトギス、シギ、エナガ、キツツキ、クイナ、オオタカなど	カラス、スズメ、ツバメ、キジ、メジロ、ウグイス、ヒバリ、カイツブリ、シジュウカラ、ムクドリ、ヒヨドリ、モズ、コサギ、カモメ、ハト、オオバンなど
その他	タヌキ、トンボ、クサガメ、アマガエル、アカガエル、ヒキガエル、二ホンザリガニ、ウサギ、イタチ、ネズミ、ミズスマシ、ゲンゴロウ、タイコウチ、ミズカマキリ、アオダイショウなど	トンボ、ウシガエル、アマガエル、カミツキガメ、ミドリガメ、イタチ、ネズミ、アメリカザリガニなど

気づかせたいポイント

(時間的変化) • 昔と今で、沼岸の様子が変わっていること。

(多様性の変化) • 生物の種類が減っていること。

• 外来生物が多くなってきていること。

• 在来生物がいなくなってきたこと。

(関連性)

• 環境の変化にともなって、生息できる種が違うということ。

• 外来生物の中には、人間の生活にマイナスの影響があるものがあるということ。また、駆除するべき種もいるということ。

(2) 発展

- ・印旛沼等の身近な場所での自然環境の実態を知ることから、それを改善していく方法を考えさせ、自然破壊の原因や環境保護の視点での意識を高めさる。
- ・地球環境の未来を考え、大気中の二酸化炭素やメタンの増加による温暖化やオゾン層破壊の問題、酸性雨、異常気象や砂漠化、エネルギー問題等、地球規模で環境問題をとらえ、様々な事象に対して深く思考し、課題に対しての対策を考えていかないといけないという使命感に発展させていく。
- ・生物種の絶滅や減少、生息地域（分布）の変化に気づき、その原因となる事象について考え、その対策を模索していこうとする意識を高める。
- ・ビオトープやエコトープ（エコトーン）、谷津や里山等についても知識や理解を深める。印旛沼から離れた地域では、身近にある谷津や里山の生態系を中心にして学習活動をすすめる。

(3) 授業のポイント

- ・できるだけ、視覚に訴えることができるよう、写真等を工夫して提示する。
- ・印旛沼の美しさや、環境保全のために尽力している人たちを写真等で紹介することで、他人事ではなく、自分自身の事として、意識を高められるように工夫して実践する。
- ・写真は、大きく拡大して印刷したものを使うか、または、生徒個々のパソコンのディスプレイに提示する。

(4) 留意点

- ・教科書にある指標生物の写真は、川におけるものであるため、沼で考える時には、そのまま活用できず、参考としての資料として扱いとする。
しかし、環境条件によって生息種に違いがあることに気づかせ、「環境状態を知るための指標となる生物がいる。」ことを理解させるための資料として有効に活用していく。
- ・生物の多様性については、水生生物等の小動物だけでなく、植物（草本や樹木）や水中の微生物や土壤中のバクテリア等の微生物も関連していることを補足する。